金魚ねぶた

金魚は日本中で夏の風物詩とみなされていますが、青森の人々は特に、金魚と密接な関係があります。ねぶた祭が近づくと、青森市内の至る所で、金魚をモチーフとした紙やビニールの灯篭が見られ、駅舎や店頭など、多くの場所を飾ります。祭の間は、それらの可愛らしい灯篭の周りを子供達が歩き回る姿も見られ、お土産屋さんでは灯篭そのものだけでなく、お菓子やキーホルダー、手持ち扇風機や、子供達が好きそうなものなどを売っています。灯篭は元来、ねぶたの装飾として用いられてきましたが、この伝統がいつ始まったのかは定かではありません。しかし、江戸時代（1603〜1867 年）の終わりには少なくとも、祭に登場していました。

灯篭に描かれる金魚は、津軽錦という種で、（現在の青森県の一部である）津軽地方で、江戸時代の間、長年にわたり人為選択された結果として生まれました。地元の侍や、そのほか身分の高い人たちにだけしか、この金魚の種を所有することは許されていませんでした。それには背びれがない代わりに、独特の長い尾びれがあります。他に類を見ないその特徴のおかげで、その種は一般の人々の間で大きな関心を集め、その見た目を灯篭に描くようになりました。それは初めは和紙で作られていましたが、1980 年代前半にビニールのものが作られるようになってからは、そちらがかなり一般的なものとなりました。